平良牧師の説教「罪が完全に赦され」分析

2026 年 9 月 28 日

吉村和雄

1、第一印象

沖縄説教セミナーにおいて聴き手が抱いた第一印象

・初めはしみじみとしみる言葉。真ん中以降はそれほどでもなかった。
・罪赦された女の喜び。
・パリサイ人の罪と女の罪の対比をもっと強く。
・やさしい口調、わかりやすい。内容が伝わった。
・何度も説教している説教者の説教。
・み言葉に忠実。会衆は一緒になれたか。
・淡々と語っている。メリハリが欲しい。

第一印象の総括

経験の長い説教者の説教であることがよくわかる。テキストが伝える出来事を、情感を込めて語り聞かせている。難しい言葉はなく、やさしい口調でわかりやすい。罪赦された者の幸いを強調するために、赦された女性の感謝の姿が全面に出てきている。その分ファリサイ派の人シモンと主イエスの姿が薄くなっている。会衆は罪赦された女と自分を一緒にできただろうか。言葉遣いの点で、「完全な赦し」が繰り返し強調されているのが心に残った。

2、基本的な問い

①この説教は、どのような説教なのか

・与えられたテキストを説いているので、講解説教である。そこから主題を見出して展開しているので、主題的講解説教である。主題は「罪赦された者の感謝」。
・説き方は帰納的というよりも演繹的である。結論を聴き手に委ねることなく、情熱をもって自分がテキストから聞き取ったメッセージを説いている。
・説得の構造としては論理を積み重ねて聴き手を説得していくよりも、物語を語りながらひとつのイメージを伝えていく形なので、物語的構造だと言える。ただ全体が物語ではなく、途中で聴き手の現実への適用や、神の名による言葉として語っている部分もある。

②説教者は聖書テキストに対してどのような姿勢でいるか。

・解説的ではない。テキストから読み取った使信を自分の言葉で語ろうとしている。物語の語り手であると同時に証言者として自分の体験も語っている。

③説教者はこの説教で何を語り、どのような出来事を起こそうとしているか。

・説教者がしようとしていることは、テキストが伝える罪の女と聴き手を重ね合わせることによって、罪赦された者の幸いを改めて体験させること。

3、分析の方法を定める

(1) この説教の問題点、あるいは特色

①聖書の捉え方においては、罪を赦された女の感謝に焦点が合わされていて、主イエスが取り上げておられるファリサイ派の罪について、また罪を赦す方としての主イエスのお姿については殆ど触れられない。

②聴き手については、罪を赦されている幸いを改めて心に刻んで欲しいと願っている。
③言葉の整え方については、構造分析で明らかにする。

4、分　析

A 構造分析

Ⅰ　テキストへの導入。

① 3～12　導入

この説教の中心的使信である「罪が完全に赦されたわたしたち」が宣言される。初めに、この説教で語ることを明らかにする。「完全に」が強調される。

②13～22　導入の補足。

自分を導いてくれたアメリカ人青年との交わりの紹介。会う度に涙が流れる。物語の女性も涙を流した。「涙を流す」。これもこの説教の特色のひとつ。

Ⅱ　物　語

(1) 物語の枠組み

①23～35　シモンの描写

どういう出来事だったか。どこで、どういう状況で起こったのか。出来事の基本情報を語る。主を招いたファリサイ派の心の中。当時の食事の習慣など。

②36～44　女性の描写

この説教の中心人物である女性の心の中の描写。どれほど強い思いで主イエスに会いたいと思ったか。居ても立ってもいられない、大切な香油の壺を持ってきて、駆け足でやってきた。

(2) 女性の行為

①45～52　女性の行為の描写。

涙で足を濡らし、髪の毛で拭い、接吻して、香油を塗った。女性の精一杯の感謝の表明。その思いがわたしたちに伝わってくる。聴き手と女性を重ねる。

②53～68　行為の理由の説明

この女性は町の人から「罪深い女」と呼ばれていた。以前に主イエスと出会って、愛と赦しを受けていた。だから主イエスに会いたいという思いが溢れて、追い出される危険をも顧みず、厳格なファリサイ派の家に来た。

③69～84　補足の説明

1 の②、導入の補足で紹介した人とアメリカで会って涙を流した話の紹介。涙を流し続ける女性と結びつける。

④85～92　再び女性の行為の描写

足が濡れるほど大量に涙を流した。主イエスへの愛と感謝が溢れた行為として強調する。

(3) シモンと主イエスの対話

①93～103　不審な目で女性を見るシモンと、彼に問いかけられる主イエス。

赦された負債の額の大小が、感謝の大小になる。シモンは正解する。

②104～115　主イエスの問いかけの意味を説き明かす。

自分の罪の大きさを知っていた女性は主に感謝をした。しかし自分が罪人であると知らなかったシモンは心を開かなかった。

Ⅲ　メッセージ

①129～139　神の名による言葉

わたしたちの主イエスによって罪赦された者。その主イエスを信じることによって、わたしたちは新しく生きる者へと変えられる。

②140～149　罪赦された仲間の話

沖縄説教セミナーが行われた北山荘で、中高生や青年が信仰を与えられ、献身者が起こされた。主イエスに出会って、完全に罪を赦され、新しくされた思い出がその場所にある。

③150～165　勧めの言葉。罪赦された女性、罪赦されたわたしたち

この女性も完全に罪を赦された者であった。その喜びと感謝が香油を足に塗るという行為に表れている。その罪の赦しは、わたしたちにも与えられている。罪を完全に赦された者として、主イエスを愛し、互いを愛しつつ共に歩んで行こう。

B　４つの言葉の色分けは省略

C　鍵になる言葉として特徴的なのは「涙」、「完全な赦し」

D　語り口はこの説教者独特の語り口がある。やさしい口調でわかりやすい。経験を積んだ説教者の語り方で親しみやすい。テキストの伝える出来事も、自分の経験も、物語ることができている。聴き手の心に訴えると同時に、情緒的になりやすい。

5　説教を分析してみて

①最初に述べたように、この説教は、起こった出来事の世界に聴き手を招き入れ、罪を赦された女性と聴き手を重ね合わせることによって、自分も罪赦された者であることを改めて思い起こさせ、その幸いを心深く体験させようとする説教である。言葉遣いはやさしくわかりやすい。語り方も経験を積んだ者の語り方で、説得力がある。教会の人たちも喜んでこの説教に耳を傾けたであろうと思う。

②言葉遣いで特徴的なのは「完全に」という言葉である。それが、特に最後のメッセージの部分で多用される。「完全に罪が赦される」「完全に罪が赦された」この言葉が頻出する。なぜ罪の赦しに「完全に」という言葉がつくのだろうか。恐らく、主イエスの十字架によって自分の罪が赦されているということは、信仰者であれば誰もが知っていることだからだろう。知っていても、それが信仰生活を支える力になっていない。説教者は、そこを何とかしたいと思ったのではないか。ただの「罪の赦し」ではなく、「完全な罪の赦し」を語ることによって、自分の罪が赦されていることを、新しい思いで受け止めて欲しいと願ったのであろう。それはよく理解できることである。

③そのためにこの説教では、罪赦された女性を描くことに力を注ぐ。特に主イエスの足に涙を注ぎ、髪の毛で拭い、接吻して、香油を注いだ行為が強調される。そこに表れている女性の感謝の思いを強調する。完全に罪が赦されることが、どれほどの感謝に値することであるかを、女性の姿を描くことによって伝えようとする。

④この説教において、涙が強調されるのも、同じ理由であろう。説教者自身の涙の体験も繰り返し言及される。ただ、それによって。説教の全体が情緒的に流れる傾向になったことは否定できない。

⑤第一印象にも述べられているように、ファリサイ派の罪とこの女性の罪の対比が語られていない。総じて、ファリサイ派に対する言及は、紋切り型に感じる。シモンが主イエスを招いたのは、主の本当の正体を見極めるためだ、とあるが、そうだろうか。もっと積極的な意味があったのではないか。ともかく主は彼の招待をお受けになったのである。それは彼自身が新しい生活を始める入り口になり得ることではなかったのか。金貸しの譬えで、５００デナリオンの負債を抱えた者も、５０デナリオンの者も、同じく赦されているのである。そこに、シモンに対する主イエスの眼差しがあったのではないか。

⑥シモンは「この人がもし預言者なら、自分に触れている女がだれで、どんな人かわかるはずだ」と考えた。その通り、主イエスはわかっておられた。この女性が自分を知っている以上に、それを超えて、主はこの女性の真の姿を知っておられた。悔い改めとは、悪いことをやめることではなく、主に知られている自分に希望を見出して、その自分になろうとすることである。そして同じ眼差しは、ファリサイ派のシモンにも向けられていたはずである。

⑦主イエスが共にいてくださることが、女性に希望を与え、新しくした。主は今、シモンと共にいてくださる。それはシモンに希望を与え、新しくする可能性を秘めた出来事である。残念ながらシモンはそれを見出すことが出来なかった。そして主は今、礼拝において、わたしたちと共にいてくださる。それはわたしたちに希望を与え、新しくする可能性を秘めた事実なのではないか。

⑧テキストは全体的に説教の中で説かれているが、49 節の「同席の人たちは『罪まで赦すこの人は、いったい何者だろう』と考え始めた」が抜けている。これは 39 節の「この人がもし預言者なら、自分に触れている女が誰で、どんな人かわかるはずだ。罪深い女なのに」と関係のある言葉である。この言葉を手懸かりに、主イエスを説く可能性がこのテキストにはあると思う。この説教においては、説教準備の比較的に早い段階で語るべきメッセージを見つけ出して、そこに集中して語った感がある。もう少し落ち着いた目でテキストの全体を読んで見れば、また別な説教の可能性が見出せるのではないか。